北京市周辺における遼塔の第一層塔身荘厳モティーフについて
－北京天寧寺塔再考の第一段階として－

A Study of Decorative Motifs on the Stūpa in Liao Dynasty Around the Beijing :
for the First Approch to Tian-ning Temple Stūpa

水　野　さ　や
MIZUNO Saya

１．はじめに

北京市宣武区に位置する天寧寺は、北魏時代に光林寺として創建された後、隋・唐・遼・金の歴代王朝において寺号を変えながら存続し、明代になり天寧寺と号するに至る。境内に現存する八角十三層塼塔（天寧寺塔、図１－１～４）の建立年代については、房山雲居寺南塔（北京市房山区）、通州燃灯塔（北京市通州区）など、北京市周辺地区の塼塔との類似から遼代とされ、また、天寧寺塔を模したことが知られる慈寿寺塔（1578年頃、北京市海淀区）の存在により、かつては遼から明代までの諸説が提示されてきた[1]。天寧寺塔に関する従来の諸説をまとめ、詳細に報告された松木民雄氏の論考[2]は、羅哲文氏による見解[3]、すなわち、遼の天慶七年(1117)頃の建立と推測される雲居寺南塔と天寧寺塔が類似することから1100～1120年前後と推測する説を支持している。そして、1991年の修理中に塔内より発見された『大遼燕京天王寺建舎利塔記』に、天慶九年(1119)着工、翌十年(1120年)完工の旨が刻記されており、天寧寺塔の創建年代に対しては決着した感がある[4]。

しかし、天寧寺塔は第一層搭身の八面すべてに尊像を表すが、「類似する」と指摘される雲居寺南塔(図２)[5]においてそれは見られず、北京市周辺に現存する遼搭は、むしろ雲居寺南搭のように尊像を表さない、もしくは後述の如く限定されたモティーフであることが多い。天寧寺塔は、北京市周辺においては異例であるといえる。すなわち、遼代に塔が建立されていたことは認められるであろうが、現状における第一層塔身の浮彫尊像をも遼代の造像と断定することには疑問を感じる。現状における天寧寺塔の年代および建立の背景に関して、第一層塔身部に尊像を伴う他の遼塔との比較を通し、あらためて考察する必要は残されていると思われる。

遼寧省および内モンゴル自治区に現存する遼塔には、第一層塔身部に浮彫尊像を表す塔もかなり現存する。これらの遼塔との比較を通し、天寧寺塔の塔身部の尊像構成の特徴と性格を考察し、建立目的と現状の塔の年代に対する再考察を行うことが本研究の最終目的であるが、本稿においてはその第一段階として、遼代の南京地区（北京市とその周辺）に現存する遼塔、および遼塔を継承する金塔をも適宜取り上げ、第一層塔身部の浮彫モティーフの特徴を概観したい。

２．仏塔の第一層塔身部浮彫モティーフ

遼代の南京地区には、現在の北京市、天津市、河北省の一部が該当する。北京市房山区に位置する雲居寺など、隋・唐に遡る仏教遺品も数多く現存する地区である。燕雲十六州の割譲により、この地を北宋から手に入れた遼であったが、契丹人の支配者層に強制的に支配させるというよりはむしろ、既存の支配･統治機構、すなわち漢民族の統治体制を活用し、その上に遼朝の支配を成り立たせていたことについては、これまでに多く指摘される通りである。

［キーワード］雲居寺北塔　観音寺白塔　戒台寺　潭柘寺　銀山塔林

ここでは遼代に建立された南京地区の仏塔を中心に、これまでに実地調査におよぶことができた作例を取り上げる。

（1）雲居寺北塔

雲居寺は、隋代に幽州の智泉寺の僧静琬の創建による。静琬が発願した石経の彫造は、隋の大業年間(605～618)から唐の貞観十三年(639)におよんだ。静琬の死後も石経事業は継続し、遼・金代も行われている。遼代に大規模な伽藍の復建が行われ、南京地区での重要な寺院であり続けたことが知られる。遼の天慶七年(1117)に石経一万枚余を埋納し、その傍らに建てた塔が雲居寺南塔であったと伝える。また、天慶八年(1118)に記された沙門志才撰「大遼涿鹿山雲居寺続秘蔵石経塔記」は、現在北京の首都博物館に所蔵されている。

雲居寺北塔（図３－１～３）は、八角基壇の上に二重の塔身を載せ、その上部にラマ塔形式の覆鉢と相輪を設ける高さ約22m[6]の塼塔である。第一層塔身には、東・西・南・北の四面に龕を設け、他面は格子窓を彫出する。浮彫尊像は表さない。基壇部に奏楽天、力士、獅子などを配し、また、「法舎利塔」の浮彫を嵌める。この「法舎利塔」には、「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説」と記される。

（2）観音寺白塔

観音寺白塔（図４－１～６）は、遼代の木造建築および塑造十一面観音菩薩立像で知られる独楽寺（天津市薊県）の南300mほどに位置する。八角基壇の上に密檐式三層の塔身を載せ、その上部にラマ塔形式の覆鉢と相輪を設ける高さ30.6m[7]の塼塔である。塔内の調査・修理時に天宮および地宮から納入品が出土しており[8]、それらは天津美術博物館に所蔵されている。納入品の中には、遼の清寧四年(1058)銘を刻む石製の舎利函等がある。第一層塔身は、東・西・南・北の四面に門扉を設け、他面には、上部に小仏龕を表す碑形を浮彫し、文字を陰刻する。また、隅柱に宝塔を表す。各面の碑形には、西南面に「因縁尽故滅、我作如是説」、西北面に「諸法従縁起、如来説是因」、東北面に「彼法因縁尽、是大沙門説」、東南面に「諸法因縁生、我説是因縁」と記される。

（3）多角多層密檐式の塼塔

遼寧省および内モンゴル自治区の遼・金塔に最もよく認められる仏塔の形式は、多角多層密檐式の塼塔である。朝陽北塔など四角もあるが、八角が最も多く、次第に遼代末期には六角も出現する。金代もこの形式を受け、八角と六角の塼塔が併存している。

照塔（北京市房山区、図５）は、遼代とされる八角七層密檐式塼塔で、高さは15m[9]とされる。第一層塔身は門扉と窓を表すのみで、浮彫尊像による荘厳はない。玉皇塔（北京市房山区、図６）は八角五層密檐式塼塔で、高さは15m[10]とされる。本塔も浮彫尊像は表されない。

また、今回、実見はかなわなかったが、天津市薊県の福山塔は、遼代晩期と推定される八角三層密檐式の塼塔である。第一層塔身部には、半裁塔（内モンゴル自治区赤峰市寧城県）のように、八角三層の宝塔を二基ずつ、西南・西北・東北・東南の四面に表すと推測される。

（4）楼閣式塼塔

その他、良郷塔（北京市房山区）、天開塔（北京市房山区）など、いわゆる楼閣式の塼塔も認められる。遼の咸雍四年(1068)頃と推定されている良郷塔は（図８－１・２）、八角五層楼閣式塼塔で、現状における高さは26.7m[11]である。また、遼の乾統九年(1109)銘の石函が出土（現在は首都博物館に所蔵）している天開塔（図７）は八角三層楼閣式塼塔である[12]。両塔とも、南・西・北・東の四面に龕を設け、他の四面に格子窓を彫出する。ともに近年の修理が著しく、大半が後補材に代わっているが、修理前の写真など、またかろうじて残る当初の塼などから判断しても、第一層塔身に浮彫尊像などは表されなかったようである。なお、良郷塔において、基壇部に奏楽天・力士・獅子などが認められるが、遼代創建当初と認められるものは極めて限られている。

（5）花塔形式の塼塔

鎮岡塔（北京市豊台区）および万仏堂孔水洞塔（北京市房山区）など、塔身の上に載る相輪部が全体的に弾丸形を呈し、そこに多くの小龕を配する塔、いわゆる花塔形式の仏塔が、北京市および河北省に認められる。

金代と推定される鎮岡塔（図９）は、現状において高さ18m[13]である。八角基壇上に単層の塔身を載せ、塔身に浮彫尊像は認められない。南・西・北・東の四面に門扉を、他の四面に格子窓を表す。門扉拱輪部外区に植物文と獣面が表される。なお、覆鉢部・相輪部には、如来像、菩薩像、天部像、羅漢像などの小像が龕内に安置され、基壇部には奏楽天・力士・獅子などを表すが、現状において、創建当初部分の判別は困難である。

万仏堂孔水洞塔（図10－１～４）は、創建は遼の咸雍六年(1070)頃とされるが、現状において、その表面には修理の際の塼が多く認められる。塔身の南面に龕を設け、西・東・北面に門扉、他の四面に格子窓を彫出する。相輪部には小龕に獅子などを、基壇部には下部に力士像、神将像、金剛鈴などの法具、格狭間内に奏楽天、獅子、植物文など、上部に竜と獅子などが認められる。

塔身の南面は、龕の上方に宝冠を戴き智拳印を結ぶ菩薩形金剛界大日如来坐像、その周囲に菩薩像四軀を配し、龕の左右上段に菩薩立像、下段に力士像を配する。龕上部拱輪部には、蓮華蔓草文と飛天二軀を表す。

西南・東南の両面には、それぞれ格子窓の上に騎獅文殊・騎象普賢の両菩薩を表す。その他周囲に尊像が配されたようであるが、欠失している箇所が多い。なお、南・西南・東南の三面は、大日如来・騎獅文殊・騎象普賢の三尊形式を意図するものであろう。

西面は、門扉拱輪部内区に牡丹文、外区には左右から飛翔する竜を表す。門扉の上に蓮華座上の如来坐像（欠失）、左右に菩薩像三軀、雲気と竜など、門扉左右に神将像を表す。

東面は、門扉拱輪部内区に小型の如来坐像二軀、外区中央に蔓草を食む獣面を表す。門扉の上は欠失しており、おそらく如来坐像があったと思われる。その左右に菩薩立像二軀、上部に小型の羅漢像四軀、門扉左右に神将像を表す。

北面は、門扉拱輪部内区には何も表さず（現状）、外区には牡丹蔓草文およびそれと戯れる童子像四軀を配する。門扉の上に蓮華座上の如来坐像（左手は腹前、右手は胸前に置く）、左右に比丘立像二軀と持物を掲げ持つ供養菩薩像二軀、小仏坐像二軀、門扉の左右に神将像を表す。北面の門扉は向かって右側の扉がわずかに開き、中から人物が半身を表す。これは、河北省趙州の仏頂尊勝陀羅尼経幢など、隋・唐以降しばしば認められる表現である。

東北面は、格子窓の上に牛一頭、供養者ないし菩薩像計三軀を表す。西北面は、格子窓の上に馬一頭、人物像計二軀を表す。

現状において各部を構成する浮彫尊像は上記の通りであるが、基壇・塔身・相輪部ともに、すべて遼代創建時と認められるかは疑問がある。塔身の北面門扉の人物像および門扉左右の神将像・菩薩像などの一部を除き、多くの尊像が丸彫に近い立体感を有し、丸く突き出た顔立ちなどは、基本的に遼代の彫像とは思われない。

以上、遼代の南京地区における遼・金の仏塔のうち今回確認におよぶことができた限りにおいては、第一層塔身に特定の尊像を表す例は希であり、宝塔（舎利塔）モティーフおよびそれに関連する経軌の文言の他は、大半において門扉・格子窓の装飾であった。その中で、現存の尊像すべてを遼代と認めるには疑問が残るものの、万仏堂孔水洞塔においては、天寧寺塔と共通する尊像（図１－３を参照）が認められたことは興味深いが、現状における尊像の年代を含め、今後の課題としたい。

一方、雲居寺北塔および観音寺白塔から、塔に求められた機能を考えてみたい。雲居寺北塔基壇部の「法舎利塔」に陽刻された「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説」については、法華経の引用との指摘がある[14]。確かに、朝陽北塔他、塔内天宮に納入された経典類の中に『法華経』は含まれる

ことが多い。遼代に多くの仏塔が建立された背景に、『法華経』に説く多宝塔の思想があるとされる。これに異を唱える用意はないものの、それ以上に、より実用的な起塔と修塔の効能が求められていたと考えている。

朝陽北塔（遼寧省朝陽市）、中京大塔（内モンゴル自治区赤峰市寧城県）[15]などの塔には、宝塔形の区画内に「浄飯王宮生処塔」・「菩提樹下成仏塔」・「鹿野苑中法輪塔」・「給孤独園名称塔」・「曲女城辺宝階塔」・「耆闍崛山般若塔」・「菴羅衛林維摩塔」・「沙羅林中円寂塔」と刻まれているが、これは『大乗本生心地観経』に依拠する八大霊塔である。また、銘文を記さないが宝塔モティーフを塔身部にあらわす塔は多く、それは弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』に「当持呪本置於塔中供養此塔。或作小泥塔満足七十七。各以一本置於塔中而興供養如法作已。命欲尽者而更延寿。一切宿障諸悪趣業悉皆滅尽」[16]と説かれるように、多くの小塔の造立により延寿と一切の宿障諸悪趣業の皆滅を獲得することを期待したためと考えられる。ここに『大乗本生心地観経』の八大霊塔に帰依することで獲得できる効力[17]が加わり、「尊勝陀羅尼の効力＝塔の効力＝（諸々の塔の代表的存在としての）八大霊塔の存在」という関係性が成立する。八大霊塔を建立する目的は本経においても、また宋代の法賢訳『八大霊塔名号経』においても、「発大信心修建塔廟承事供養。是人得大利益。獲大果報具大称讃」のように、八大霊塔を供養すれば増益し果報を得られ、また、「此八大霊塔。向此生中至誠供養。是人命終速生天界」[18]のように霊塔供養により天界への往生を保証するなど、明確である。期待される効果と造形との結び付きの明快さが、遼塔建立の目的の根底にあると考えている[19]。

このように、東京地区（朝陽周辺）および中京地区（赤峰市寧城県）における遼塔に刻まれる経文には、具体的な効果を保証する経軌から引用される傾向が強く、その立地も、『仏頂尊勝陀羅尼経』に説く陀羅尼の効力を発揮するのに適した場所が想定されていた。そのため、雲居寺北塔の「法舎利塔」銘文についても、ここでは『造仏功徳経』との関係を強調しておきたい。唐の地婆訶羅訳『造仏功徳経』においては、塔を建立することで得られる具体的な功徳が説かれるが、世尊は「諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説」の偈を書写し建立した塔内に安置することを述べる[20]。また、観音寺白塔における東南面の「諸法因縁生、我説是因縁」と西南面の「因縁尽故滅、我作如是説」は、雲居寺北塔の「法舎利塔」銘文と共通するが、西北面の「諸法従縁起、如来説是因」、東北面の「彼法因縁尽、是大沙門説」については、唐の義浄訳『浴仏功徳経』に認められる。「我涅槃後。若欲供養此三身者。当供養舎利。然有二種。一者身骨舎利二者法頌舎利。即説頌曰、諸法従縁起、如来説是因、彼法因縁尽、是大沙門説、若男子女人苾芻五衆応造仏像。若無力者下至大如麥。造窣覩波形如棗許。刹竿如針。蓋如麩片。舎利如芥子。或写法頌安置其中。如上珍奇而為供養」[21]とあり、「諸法従縁起、如来説是因、彼法因縁尽、是大沙門説」の法頌を書写して塔内に安置することが説かれている。また、隅柱ないし第一層塔身の各面に宝塔モティーフを表す目的は、先の述べたとおり、多くの小塔の造立により得られる功徳を期待してのものであろう。南京地区の遼塔においても、「八大霊塔」という形は取らないものの、その建立の目的に共通性は認められると思われる。

３．僧塔の第一層塔身部浮彫モティーフ

仏塔の他、高僧の僧塔（墓塔）も数多く現存している。年代が確定できるもの、保存状態が比較的良いものを中心に、また、遼塔の形式を継承する金代の塔も合わせて、これまでに実地調査におよぶことができた作例を取り上げる。

（１）戒台寺法均大師衣鉢塔および霊塔

戒台寺（北京市門頭溝区）は隋代の創建とされ、唐代に一次荒廃するも、遼代に復興されたとする[22]。この戒台寺に住し、戒壇を建立（1070年）させた僧法均（1021～1075年）に関わる塔二基と、大安七年（1081）銘の『法均大師遺行碑』（図11）が境内に現存

する。この遺行碑により、法均の入滅は大康元年(1075)三月四日であり、同月の二十八日に荼毘に伏し、五月十二日に起塔、合わせて尊勝陀羅尼経幢を建てたことが知られる[23]。

法均大師衣鉢塔（図12－１・２）は八角五層密檐式塼塔で、高さは約11m[24]である。八角の第一層塔身は、南・西・北・東の四面に門扉を設け、間の四面には格子窓を表す。南・西・北・東面とも、現状において門扉拱輪部内区には何も表さない。外区には、南・北面には中央の宝珠を挟んで左右に竜を、東・西の両面には、中央の宝珠を挟んで左右に鳳凰を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫し、各面の隅柱は八角五層塔とする。なお、基壇部は大半が後補材であるが、一部に植物文が現存する。

法均大師霊塔（図13－１・２）は、八角七層密檐式塼塔で、現状における高さは約15m[25]である。現状において、塔身部第一層には、東・西・南・北の四面に門扉、間の四面に格子窓を表すが、本塔は明代の重修を受けており、第一層塔身のみならず、二層目以上の屋蓋も明代のものと推測される。

（２）潭柘寺広慧通理禅師塔および海雲大宗師霊塔

潭柘寺（北京市門頭溝区）は、西晋の創建と伝えるが、現状は明・清代の伽藍による。境内の上・下二箇所に塔院があり、元の世祖フビライの娘である妙厳公主墓をはじめ、遼代の経幢、金・明・清代の墓塔・経幢が現存する[26]。

広慧通理禅師塔（図14－１・２）は、八角七層密檐式塼塔で、高さは約20mを超える[27]。『寺中観条』等に「金大定十五年円寂于潭柘寺仏門諡尊号為広慧通理」と著されるとされ[28]、それに従えば、本塔の建立は大定十五年(1175)頃と思われる。第一層塔身の南・西・北・東の各面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。南面門扉の上部に、「故広慧通理禅師之塔」の刻銘を有する題額を嵌める。南・西・北・東面とも、現状において門扉拱輪部内区には何も表さない。外区には、南・北面では左右から飛翔する飛天を、西・東面では蓮華蔓草文を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫する。なお、基壇部は大半が後補材であり、下部は格狭間内におそらく獅子が配されたと思われるが、欠失している。また、全体的に植物文が残存する。

海雲大宗師霊塔（図15－１・２）は、金代の六角七層密檐式塼塔で、現状における高さは約20m[29]である。第一層塔身の南・北面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。南面門扉の上部に、「仏日円明海雲大宗師之霊塔」の刻銘を有する題額を嵌める。南面においては、門扉拱輪部内区に牡丹文（大半は欠失）を配し、外区にその左右から飛翔する飛天を表す。北面においては、内区には現状において何も表さず、外区には雲をまとい左右から昇る竜を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫する。なお、基壇部は、下部に格狭間内に獅子が残存するが、上部の格狭間内は欠失している。また、植物文により全体が装飾される。

（３）銀山塔林の諸塔

北京市昌平区に位置する銀山塔林は、遼の天会三年(1125)に創建された法華寺の址とされる。現在、元・明・清代のラマ塔式塼塔、金・元代の多角多層密檐式塼塔の形式の僧塔計十四基が報告されている[30]。そのうち、次の五基の多角多層密檐式塼塔は、南を正面に前方に二基、中央に一基、後方に二基が並び立つ（図16）。各塔は、前方の西側の塔は八角十三層の「故懿行大師塔」（高21.5m[31]）、東側は八角十三層の「晦堂禅師塔」（高18.5m）、中央の塔は八角十三層の「祐国仏覚大禅師塔」（高22.8m）、後方の西側は六角七層の「円通塔大禅師扇公霊塔」（高14.7m）、東側は六角七層の「故虚静禅師実公霊塔」（高14m）であることが、各塔の第一層塔身南面に設けられた題額の刻銘より知られる。このうち、故虚静禅師実公霊塔（図26）は、南面門扉拱輪部内区の題額に、本塔名とともに「大安元年九月二十三日功畢」[32]と刻まれていることから、金の大安元年(1209)頃の建立と知られる。他の四塔に年紀はないが、懿行大師および円通大師は寺址に現存する金の大定六年(1166)重修碑（明代に重刻されたもの）に、晦堂禅師は『元一統志』に登場する高僧、祐国仏覚禅師は『明高僧伝』

に皇統五年(1145)に入寂した海慧であることが指摘されており[33]、五塔はいずれも金代の僧塔で、十二世紀中頃から十三世紀初め頃にかけて建立されたものである。

懿行大師塔（図17－１～７）は、八角の第一層塔身の南・西・北・東の各面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。南面においては、門扉拱輪部内区に「故懿行大師塔」の刻銘を、外区には雲中に天蓋が浮かび、その左右に香炉・蓮華などを掲げた飛天が飛翔する。西面においては、内区では雲中に光背を付け、蓮華座上に坐す定印の如来坐像を表し、外区は南面に準ずる。北面においては、内区は雲中に光背・蓮華座上に定印の如来坐像、外区は南面に準ずる。東面も同様、内区は雲中に光背・蓮華座上の定印の如来坐像、外区は南面に準ずる。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫する。なお、基壇部は、下段においては隅に宝瓶と牡丹、各面には雲文に縁取られた格狭間内に獅子、上段においては雲、牡丹ないしその他の花文が表される。

晦堂禅師塔（図18－１・２）は、八角の第一層塔身の南・西・北・東の各面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。門扉拱輪部には、南面は内区に「晦堂祐国仏覚大禅師塔」の刻銘（ただし、現状において表面は補修が施される）、外区には飛天が左右から飛翔する。西・東・北面においては、その内区には何も表さず、外区においては、西・東面は二羽の飛翔する鳳凰を配し、北面は南面に準ずる。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫し、各面の隅柱は経幢形とする。なお、基壇部は大半が後補材である。

祐国仏覚大禅師塔（図19－１～３）は、八角の第一層塔身の南・西・北・東の各面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。門扉拱輪部には、南面は内区に「故祐国仏覚大禅師塔」の刻銘を、外区には飛天が飛翔する（向かって右側は欠失）。西・東・北面においては、その内区には何も表さず、外区においては、西面は中央の雲気(？)を挟み二羽の鳳凰を配し、東面は中央に宝珠(？)を挟み竜を配し（向かって右側は欠失）、北面は蓮華蔓草文を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫し、各面の隅柱は経幢形とする。なお、基壇部は大半が後補材であるが、一部において、基壇下部に宝瓶・牡丹・蓮華など、植物で縁取られた格狭間（内部は欠失）が現存している。

円通塔大禅師扇公霊塔（図20－１・２）は、六角の第一層塔身の南・北面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。門扉拱輪部には、南面は内区に「円通塔大禅師扇公霊塔」の刻銘を、外区には左右から飛翔する飛天を表す。北面においては、その内区に牡丹をあらわし、外区においては、牡丹とみられる蔓草文を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫する。なお、基壇部は大半が後補材である。

虚静禅師実公霊塔（図21－１～３）は、六角の第一層塔身の南・北面に門扉を、他の四面に格子窓を配する。門扉拱輪部には、南面は内区に「故虚静禅師実公霊塔」の刻銘を、外区には蓮華蔓草文を配する。北面においては、その内区に牡丹を表し、外区においては、牡丹ないし蓮華とみられる蔓草文を配する。その他、各面の上端にパルメット文を浮彫する。なお、基壇部は大半が後補材であるが、一部に牡丹・蓮華などの植物文、蔓草文が残る。

以上、僧塔については、第一層塔身の各面上端にパルメット文装飾が付くことがまず共通する。また、門扉・格子窓を表し、門扉の周囲に飛天・竜・鳳凰・植物文（牡丹・蓮華など）により、わずかに荘厳する例が認められた。銀山塔林の懿行大師塔(図17)において、わずかに如来坐像が西・北・東の門扉拱輪部に認められたが、各像の手印はいずれも同じであり、方角により尊像を区別したというものではない。雲中に配される如来像や飛天は、仏の世界への往生、昇天を視覚化するモティーフに過ぎない感がある。竜や鳳凰が塔身部に配され、獅子が基壇部に配されることから、基壇は「地」、塔身は「天」を表すものと区別される。なお、興味深いのが、これまで確認できた限りにおいては、北京の遼・金の僧塔は門扉左右に菩薩・天王・仁王像などの諸尊の浮彫像を配しない点である。対して、唐代の僧塔においては、例えば、雲居寺境内の石塔（唐・開元十五年、図22－１・２）、神通寺竜虎塔（唐・八世紀、山東省済

南市）など、如来・菩薩・天部（天王・力士）・比丘像等を門扉左右に配する例は多い。

遼代の燕京における禅宗興隆に関する研究が進められており、唐末五代の動乱の中、この地域（唐の幽州、遼の燕京析津府、後の南京）からは多くの名僧が誕生し、彼らの活躍が基盤となり、薊県の盤山、昌平区の銀山など、遼代の初期から禅宗の道場として認識されていた[34]。これまで調査におよぶことができた遼寧省、内モンゴル自治区においては僧塔は少なく、ラマ塔形式の塔を確認することがあった。このような中京・東京地区との相違は、南京地区における仏教受容の背景の相違に目を向ける必要があろう。その一つが他地域にはあまり顕著ではない禅宗の受容であるかもしれない。今後の課題としたい。

しかし、一方において、共通する要素も多い。第一層塔身の隅柱に宝塔ないし経幢を表す例も多いが、このことは、宝塔と経幢が同じ機能を有していたことをうかがわせる。また、戒台寺法均大師遺行碑によれば、僧塔とともに尊勝陀羅尼の経幢を建立したとされる。このことから、「仏頂尊勝陀羅尼＝経幢＝塔」の関係は、仏塔においてだけではなく、僧塔においても成り立つこととなる。仏頂尊勝陀羅尼の効力を発揮し、保証するものとして、塔と経幢の建立を盛んに行う姿勢は、すでに別項において東京地区（遼寧省朝陽周辺）の遼塔により考察してきた点である。

４．むすび

遼代の南京地区における遼代の仏塔において、今回確認におよぶことができた限りにおいては、第一層塔身に特定の尊像を浮彫する例は希であり、宝塔（舎利塔）モティーフおよびそれに関連する経軌の文言の他は、大半において門扉・格子窓の装飾であった。その中で、現存の尊像すべてを遼代と認めるには疑問が残るものの、万仏堂孔水洞塔において、天寧寺塔と共通する尊像が認められたことは、今後の課題として残される。また、僧塔においては、第一層塔身の各面上端にパルメット文装飾が付き、隅柱を宝塔ないし経幢形とすることが多い。また門扉の周囲を飛天・竜・鳳凰・植物文（牡丹・蓮華等）により、わずかに荘厳する例も認められた。このような特徴は、遼寧省および内モンゴル自治区における遼塔にしばしば認められる、門扉の左右に仁王像、その他菩薩像、天部像などの浮彫尊像により荘厳する塔とは、まったく様相を異にしている。浮彫尊像による荘厳の少なさ、これが遼代の南京地区の仏塔および僧塔の展開であるならば、やはり、天寧寺塔のように多くの尊像をあらわす塔の建立背景には、別の側面から再考する必要があると思われる。

註

1　天寧寺塔に関する国内の研究者による主な先行研究は以下の通りである。
・常磐大定・関野貞『支那佛教史蹟』評解五、佛教史蹟研究曾、1928年７月、228～229頁。
本書において、天寧寺搭基壇部は「手法豊美なれども、技巧は拙なり。蓋乾隆年間の再興に属する者ならん」とし、第一層搭身については、「其様式手法を見るに、頗る宋元時代の特質を帯ぶ。蓋遼時に始めて造られ、後世屢補修の加へられし者ならん」とする。すなわち、天寧寺搭は遼代の創建であるが、現状の搭の姿は明・清時代のものと認識する。
・竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』、龍文書局、1944年12月、303～307頁。
本書において、天寧寺搭基壇部の彫刻は「其技巧は極めて拙劣にして、到底之を遼時の作と見ることは出来ない。恐らく明清の補修に際し、旧制によって作り換へたものであらう」とし、第一層搭身の彫刻については、「俊秀にして宋作とも見るを得べき素質を備へ、一概に明清の後補に成るものと見做し難いものがある。恐らく遼金の時代に成り、後世の補修を受けながらも尚当初の麗質を保持してゐるものであろう（中略）其建立年代は遼搭中比較的遅いものゝ様に思はれる」とする。すなわち、天寧寺搭は明・清の補修を受けているものの、遼代末期、おそらく十二世紀前半と想定される。
2　松木民雄「北京・天寧寺塔」、『北海道東海大学紀要』人文社会科系第15号、2002年３月、221～230頁。
3　羅哲文『中国古塔』中国青年出版社、1985年、73頁。
4　梅寧華主編『北京遼金史跡図志』下、北京燕山出版社、2004年７月、25～26頁。なお、この碑文については、松木氏も前掲註２論考において取り上げられている。
5　雲居寺南塔は戦争中に破壊され、基壇の一部を残し現存し

ていない。今回の実地調査時（2013年8月）、復元修復の作業が進められていた。なお、図２は、東方文化學院京都研究所編輯『房山雲居寺研究』東方學報第５冊副刊、東方文化學院京都研究所、1935年５月、図版二〇からの複写である。

6 梅寧華主編『北京遼金史迹図志』上、北京燕山出版社、2003年９月、36頁。

7 中国文物研究所・天津市文物管理中心・天津市薊県文物保管所『中国古代建築　薊県独楽寺』、文物出版社、2007年11月、493頁。

8 天津市歴史博物館考古隊「天津薊県独楽寺塔」、『考古学報』1989年第1期、83～119頁。

9 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、44頁。

10 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、52頁。

11 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、42頁。

12 なお、松木民雄氏は以下の論考の中で天開塔について触れ、現状の修理を受ける前の状態を記されている。それによれば、「残るアーチ門は東と北のみであるが、ともに損壊が激しく、彫刻部分を見出すことはできない」、「窓の部分は３面（東南・東北・西北）に比較的良好な状態で残っている。格子状の窓であるが実用ではない。また壁面に装飾は全く無い」という状態であった。

・松木民雄「北京・天開三塔小記」、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第６号、1993年、1～11頁。

13 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、32頁。

14 長廣敏雄「房山雲居寺塼塔記」、前掲註５『房山雲居寺研究』、248頁。

15 中京大塔（内モンゴル自治区赤峰市寧城県）は八角十三層の密檐式塼塔であり、八方の各角柱部に八大霊塔と八大菩薩の名称を以下の通りあらわす。

東南面・南面隅　「浄飯王宮生処塔」／「観世音菩薩」
南面・西南面隅　「菩提樹下成仏塔」／「慈氏菩薩」
西南面・西面隅　「鹿野園中法輪塔」／「虚空蔵菩薩」
西面・西北面隅　「給孤独園論議塔」／「普賢菩薩」
西北面・北面隅　「曲女城辺説法塔」／「金剛手菩薩」
北面・東北面隅　「耆闍崛山般若塔」／「妙吉祥菩薩」
東北面・東面隅　「菴羅林衛維摩塔」／「除蓋障菩薩」
東面・東南面隅　「沙羅林中円寂搭」／「地蔵菩薩」

中京大塔では「給孤独園論議塔」と「曲女城辺説法塔」が経典の名称と異なり、「菴羅衛林維摩塔」が「林衛」とする誤認が認められる。また、これらの菩薩が法賢訳『八大菩薩経』における菩薩名、すなわち「復有八大菩薩摩訶薩。其名曰妙吉祥菩薩摩訶薩。聖観自在菩薩摩訶薩。慈氏菩薩摩訶薩。虚空蔵菩薩摩訶薩。普賢菩薩摩訶薩。金剛手菩薩摩訶薩。除蓋障菩薩摩訶薩。地蔵菩薩摩訶薩」（『大正蔵』14-751中～下）であることについては、村田治郎氏の「遼系の仏塔」においてすでに指摘がなされている。また、近年の藤原崇人氏による論考もある。

・村田治郎「遼系の仏塔」、『満州の史蹟』、座右宝刊行会、1944年５月、425頁。

・藤原崇人「契丹（遼）の立体曼荼羅－中京大塔初層壁面の語るもの－」、『佛教史學研究』第52巻１号、佛教史學會、2009年、１～25頁。

16 『大正蔵』19-718中。

17 般若訳『大乗本生心地観経』、「若造八塔而供養　現身福寿自延長　増長智慧衆所尊　世出世願皆円満」（『大正蔵』３-296上）。

18 『大正蔵』32-773上～中。

19 拙稿「遼代朝陽北塔に関する考察」、『金沢美術工芸大学紀要』第57号、2013年、91～110頁。

20 地婆訶羅訳『造仏功徳経』「爾時世尊説是偈言、諸法因縁生、我説是因縁、因縁尽故滅、我作如是説、善男子。如是偈義名仏法身。汝当書写置彼塔内」（『大正蔵』16-801中）。

21 『大正蔵』16-800上。

22 松木民雄氏の次の論考において、戒台寺の沿革・法均について、戒台寺境内の遼塔の他、外塔林についても報告がなされている。

・松木民雄「北京・戒台寺の諸仏塔」、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第13号、2000年、77～107頁。

23 『法均大師遺行碑』

「逝蓋世寿五十五僧臘三十九実大康元年三月之四日也」「其月二十八日具礼荼毘于北峪火滅后競収霊骨以当年五月十二日起墳塔於方丈之右官給外又創影堂左右以右建尊勝陀羅尼幢各一」

「法均大師遺行碑銘録文」、前掲註４『北京遼金史迹図志』下、15頁。

24 前掲註４『北京遼金史迹図志』下、36頁。

25 前掲註４『北京遼金史迹図志』下、36頁。

26 松木民雄「北京・潭柘寺仏塔研究」、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第5号、1992年、43～75頁。

27 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、60頁。

28 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、60頁。

29 前掲註６『北京遼金史迹図志』上、58頁。

30 松木民雄氏の次の論考において、現存する塔の概要とともに、寺址に現存および出土した石碑についても詳細に取り上げられている。

・松木民雄「北京“銀山塔林”小志」、『北海道東海大学紀要』人文社会科学系第4号、1991年、81～98頁。

31 銀山五塔の高さはいずれも前掲註６『北京遼金史迹図志』上、68頁による。

32 今回の調査時（2013年８月）においては、この年紀銘は確認できなかった。表面に塗料が塗布されていたことによると思われる。松木民雄氏は、その論考において、朱祖望「聖安寺与銀山宝塔」（『北京人談北京』地質出版社、1986年に所収）を註記しながら、「「故虚静禅師実公霊塔」及びその左側に「大安元年九月二十三日功畢」と建立銘が記されている。他方、右側には「公主寂照英悟大師独営此塔」とあり、建塔が公主寂照英悟大師の手によることが判明する」とされる。前掲註30松木論考、89頁。

33　前掲註30松木論考、86および94頁。

34　契丹・遼における仏教については、密教・華厳・浄土の側面が強いという認識が主流となっている。一方、禅宗受容を積極的に考察しようとする研究もある。

・馮金忠「遼代燕京禅宗的伝播及其特点」、黄夏年主編『遼金元仏教研究』上、大象出版社、2012年11月、130～143頁。

付記

今回の実地調査および本稿は、平成25年度科学研究費による学術研究「遼・金・高麗における仏塔の浮彫荘厳に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：水野さや）および平成25年度金沢美術工芸大学奨励研究の成果の一部である。調査においては、青山学院大学・浅井和春教授、武蔵野美術大学・朴亨國教授のご協力を得、本学大学院・森田弥生が補助した。

（みずの・さや　芸術学／東洋美術史）

（2013年10月31日　受理）

図１－１　天寧寺塔（北京市宣武区）　南面

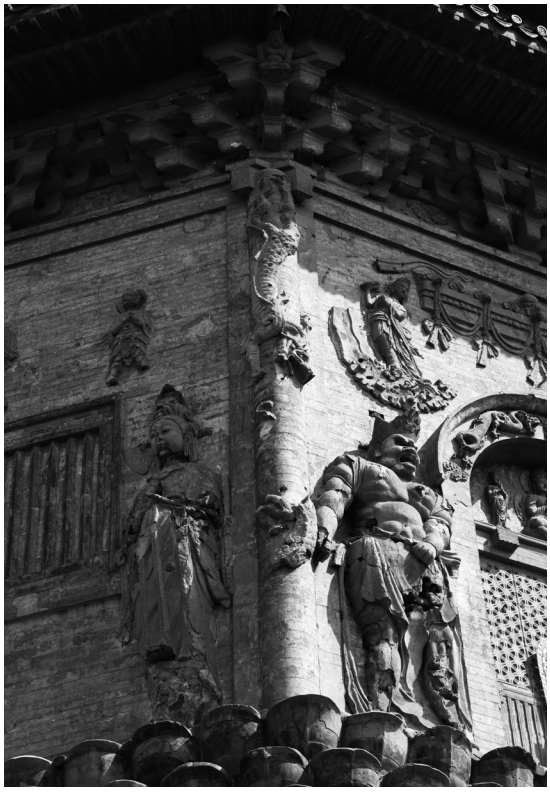

図１－２　同　塔第一層塔身隅柱　南面・西南面

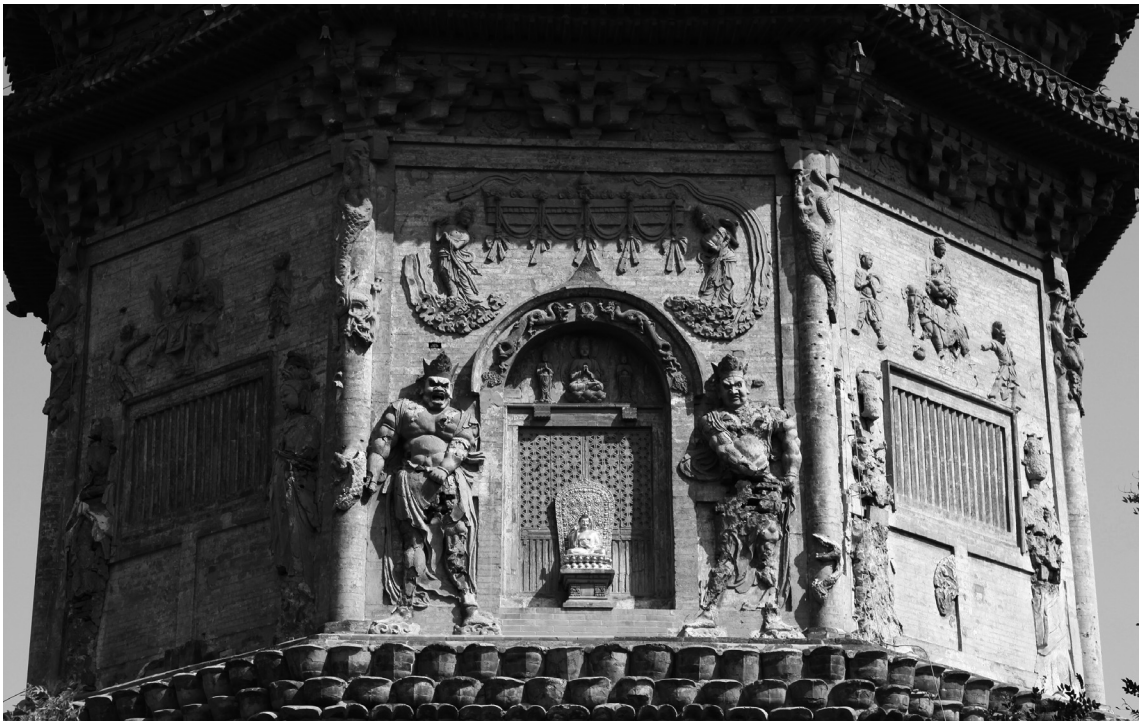

図１－３　同　第一層塔身　南面

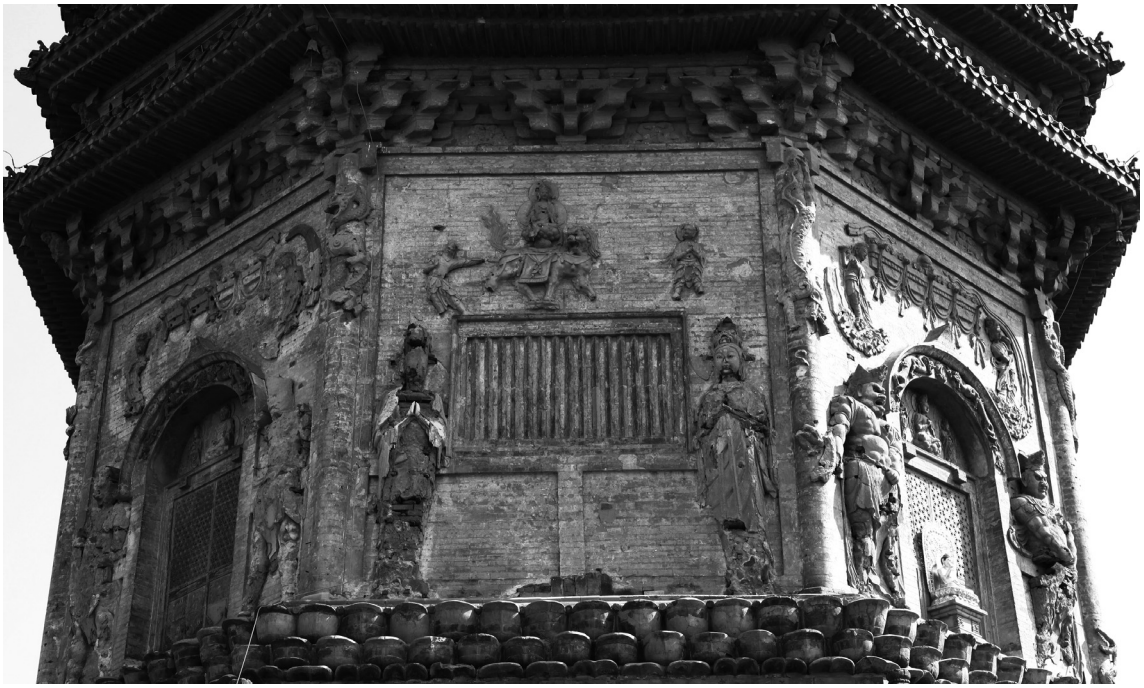

図１－４　同　第一層塔身　西南面

図２　雲居寺南塔（『房山雲居寺研究』より）

図３－１　雲居寺北塔（北京市房山区）

図３－２　同　基壇部

図３－３　同　基壇部「法舎利塔」

図４－１　観音寺白塔（天津市薊県）

図４－２　同　第一層塔身　南面

図４－３　同　第一層塔身　碑型　南西面
「因緣尽故滅　我作如是説」

図４－４　同　第一層塔身　碑形　西北面
「諸法從緣起　如来説是因」

図４－５　同　第一層塔身　碑型　東北面
「彼法因縁尽　是大沙門説」

図４－６　同　第一層塔身　碑形　東南面
「諸法因縁生　我説是因縁」

図５　照塔（北京市房山区）

図６　玉皇塔（北京市房山区）

図７　天開塔（北京市房山区）

図８－１　良郷塔（北京市房山区）

図８－２　同　基壇部　南面

図９　鎮岡塔（北京市豊台区）

図10－１　万仏堂孔水洞塔（北京市房山区）

図10－２　同　塔身　西南・南・東南面

図10－３　同　塔身　北面

図10－４　同　塔身北面門扉部分

図11　戒台寺　法均大師遺行碑
（北京市門頭溝区）

図12－１　戒台寺　法均大師衣鉢塔
（北京市門頭溝区）

図12－２　同　第一層塔身　門扉および宝塔

図13－１　戒台寺　法均大師霊塔
（北京市門頭溝区）

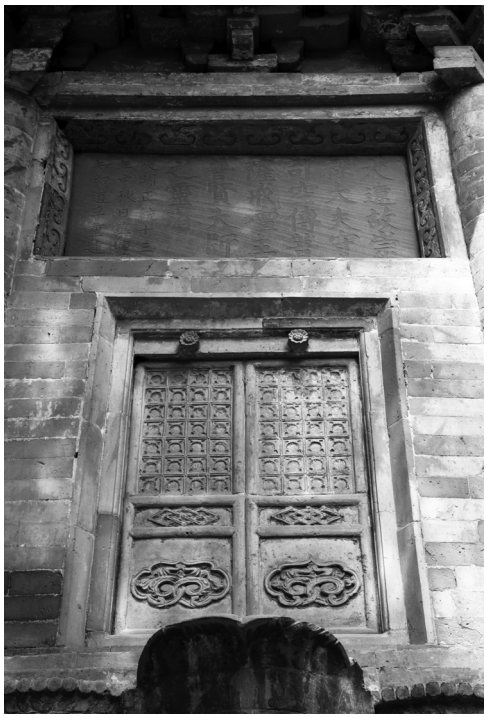

図13－２　同　南面　明・正統十三年重修銘

図14－１　潭柘寺　広慧通理禅師塔
（北京市門頭溝区）

図14－２　同　第一層塔身　南面

図15－１　潭柘寺　海雲大宗師霊塔
（北京市門頭溝区）

図15－２　同　第一層塔身　南面

図16　銀山塔林（北京市昌平区）

図17－１　懿行大師塔

図17－２　同　第一層塔身　南面

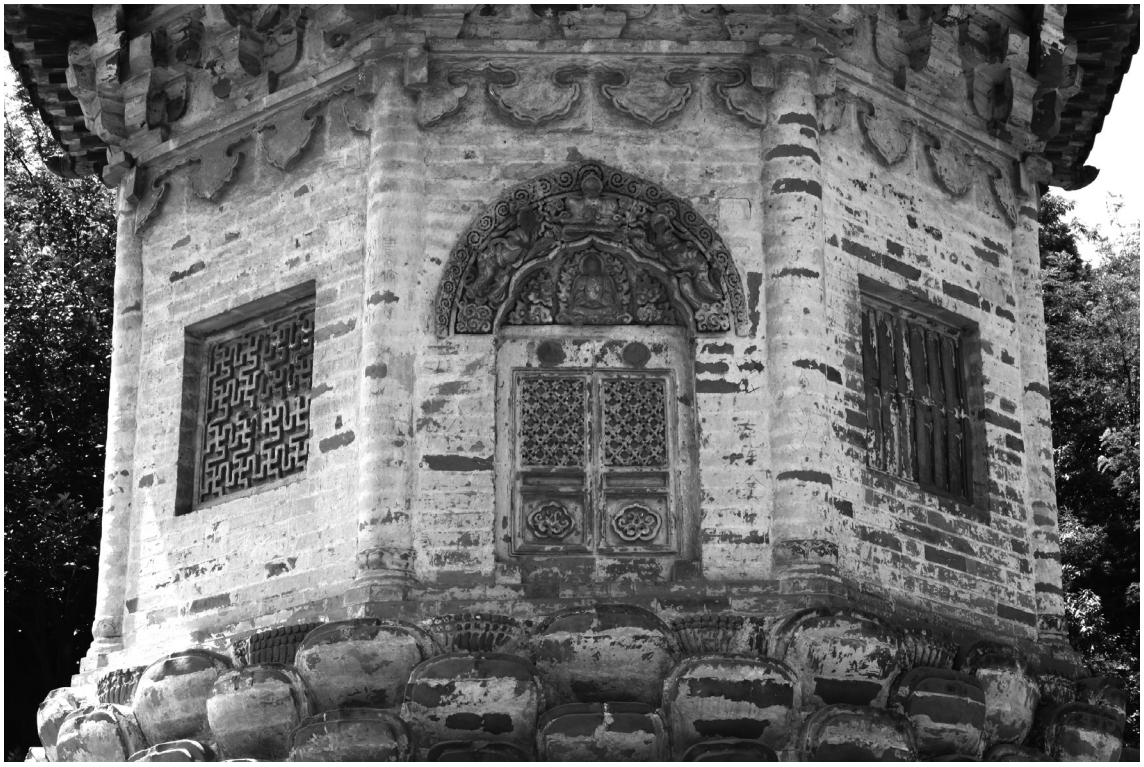

図17－３　同　第一層塔身　東面

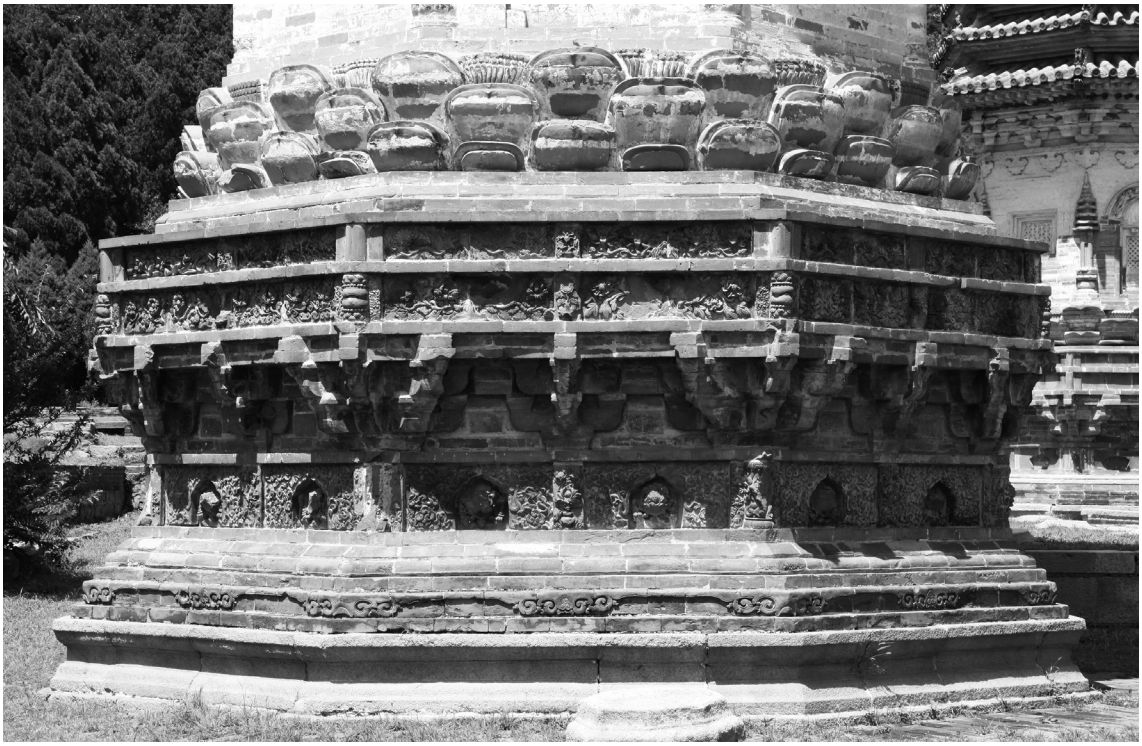

図17－４　同　基壇部　南面

図17－５　同　第一層塔身　西面

図17－６　同　第一層塔身　北面

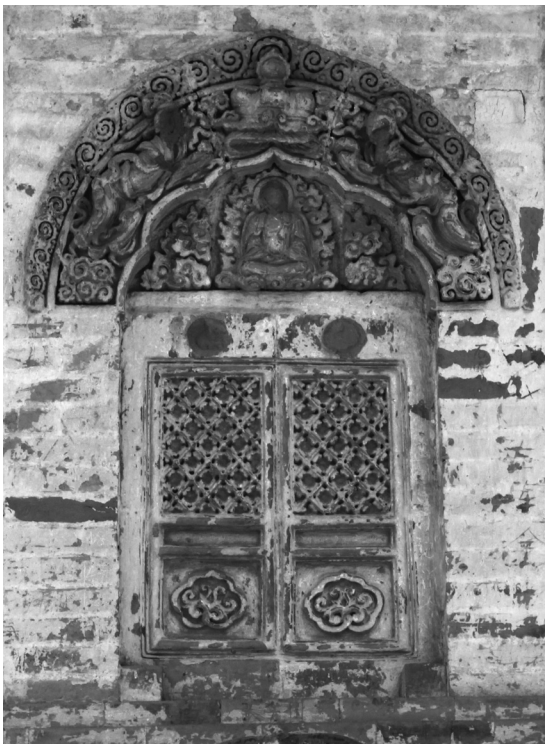

図17－７　同　第一層塔身　東面

図18－１ 晦堂禅師塔

図18－２　同　第一層塔身　南面

図19－１　祐国仏覚大禅師塔

図19－２　同　第一層塔身　南面

図19－３　同　第一層塔身　西面

図20－２　円通塔大禅師扇公霊塔　第一層塔身　南面

図20－１　円通塔大禅師扇公霊塔

図21－１　虚静禅師実公霊塔

図21－２　同　第一層塔身　南面

図21－３　同　第一層塔身　北面

図22－１　雲居寺石塔　唐・開元十五年銘
（北京市房山区）

図22－２　同　部分